

# 難民たちの英文学

## Olivia Manning の〈バルカン三部作〉

松本 朗

### はじめに

モダニズム期の作家にしばしば見られる“exile”性はその作家の自由やコスモポリタニズムといった肯定的な要素を示すことは、James Joyce などの例を見ても明らかである。しかしながら、Edward W. Said や Hannah Arendt が論じるとおり、ある人がユダヤ系等の出自により故郷を追われる身となり、希望する受入国も庇護権を行使しない場合、その人は国家と国家の間に宙吊りにされて勾留される難民の立場 (statelessness) に置かれることになるのであり、これはモダニズム作家のコスモポリタニズムとは区別して考えられる必要がある。

そのような難民に近い経験をしたイギリスのモダニズム期の作家に Olivia Manning (1908-1980) がいる。長い間イギリス文学史の周縁に位置づけられていた作家だが、最近になってその〈バルカン三部作〉(The Balkan Trilogy, 1960-1965) と〈レヴァント三部作〉(The Levant Trilogy, 1977-1980) が第二次世界大戦を描く戦争文学として注目されるようになってきている。本報告では、Manning の〈バルカン三部作〉と彼女が『ホライズン』(Horizon) 誌に寄せた評論を再文脈化することにより、〈バルカン三部作〉における難民の表象がヨーロッパのモダニズム文学の規範に揺さぶりをかける試みであることを、Hannah Arendt のユダヤ系難民の表象に関する議論を補助線にしつつ、明らかにする。

### Manning 批評の現在

これまで Manning がイギリス文学史の周縁的な存在であった理由は、彼女が従来の文学史の中の潮流にうまく収まらない作家であったことや、Manning の登場人物が婚外恋愛をすることがミドルクラスの価値観を有する第二波フェミニズム批評の批評家たちにとっては扱いづらかったことが原因であると言われる。とはいえ、2010 年以降に興隆した英国ミドルブラウ文学・文化研究によれば、Manning をミドルブラウ作家とみなせるようであり、またイギリス帝国の衰退を中東からエジプトを舞台に描く Malcolm Lowry らによる一連の作品の系譜に Manning の作品を位置づけることができるという議論も見られるようになってきている (Patten 3-4)。

しかしながら、本報告では、上記のように Manning をイギリス文学史の新たな潮流の中に再編成するのではなく、むしろイギリス文学やヨーロッパ文学の枠組みに揺さぶりをかける存在とみなしたい。じじつ、Manning は、『ホライズン』誌 1944 年 10 月号に寄せた評論「異郷の詩人たち」において、イギリス文壇のある批評家がカイロの詩人による雑誌『パーソナル・ランドスケープ』をとりあげて〈国外の詩人の質の低さ〉に言及しているのを取り上げ、怒りをこめて批判する。Manning によれば、質が低下しているのはむしろ、「近親交配」が進むイギリス文学の方であり、カイロや中東の作家・詩人はその土地の“life”を表象しているというのだ。

### 『ホライズン』誌を再文脈化する——盛期モダニズムから後期モダニズムへ

上記の Manning の評論の議論を精査するために、まずは Manning の評論を最文脈化したい。そもそも『ホライズン』誌は 1940 年に Cyril Connolly により創刊され、当初は芸術の自律性を守ることを目的としていた定期刊行物である。本報告の文脈でまず注目すべきは、創刊初期の同誌において、意外にも芸術家と戦争の関係に関する論争が行われていたことである。1940 年 6 月号で Connolly が「芸術家は戦争を無視」(309) して自身の美的な創作活動に従事すべきとの見解を提示したことに、7 月号で反論したのが、ウェールズ出身の評論家兼大学教員で、第一次世界大戦での従軍経験がある Goronwy Rees であった。Rees によれば、「芸術家が戦争をあらわさなかったら、戦争をあらわすのは政治家とジャーナリストだけになる。芸術家は戦争を表象して、国民と芸術・文化の関係が乖離した現状を修復し、安定した社会の形成に寄与しなければならない」(470-71)。この論争における Rees の優勢は明らかであった。また、Manning が評論を寄せた号の周辺において、難民を扱う記事だけでなく、政治と文学、政治と言語の関係を扱う Jean-Paul Sartre や George Orwell の評論が掲載されている。さらに、Connolly と協力して同誌の編集を行っていた Stephen Spender が書評欄において、個人主義的であった盛期モダニズム期の作家・詩人が戦時下になって異なる地域の他者との「共通の経験」を理解するようになり、世界中で起きている苦しみをあらわす新たな声を獲得する「成熟」を示していると記している。

このように『ホライズン』誌を再文脈化すると見えてくるのは、同誌やモダニスト作家が 1940 年代の戦時下で後期モダニズムへの変容を遂げ、美学と政治が不可避的に結びついているだけでなく、芸術家が戦争下の

“life”をあらわすことが芸術家と社会の関係を修復し、安定した社会の復活に繋がると考えられていたことである。Manning の評論が位置づけられるのはこの地点であり、〈バルカン三部作〉は芸術と社会の関係といった観点から解釈される必要がある。

### 〈バルカン三部作〉を読む

〈バルカン三部作〉は主人公ハリエット・プリングルとその夫ガイが、第二次世界大戦の勃発に伴ってルーマニアからアテネを経由してエジプトへと向かうまでを、途中で出会う様々な属性の人々の“life”の表象を交えつつ描く小説である。じじつ、この小説がミメシスのテーゼ「芸術は人生を模倣する」について意識的であることは、三部作のエンディング近くのプリングル夫妻の会話からも明らかである。たとえば、ブリティッシュ・カウンシルでの講義を準備中の夫ガイが、サミュエル・テイラー・コールリッジの『文学的自叙伝』の一節“A work of art must contain itself the reason why it is so, and not otherwise.” (Manning 872)を読み上げるのを聞くハリエットが、芸術の問題を人生に敷衍させて“Does life contain in itself the reason why it is so, and not otherwise?” (Manning 872)と疑問を口にする。ガイは「そうだ」と答えるが、ハリエットは納得できない。無実の人々が理不尽にも戦争で命を落とすのを見てきた彼女にとって、その人々の人生がそのようなかたち（思わぬ悲劇的なかたちで「死」を迎える）をとることを合理的に説明する理由など考えられないからである。ハリエットは、ベオグラードではあまりの死体の多さに人々が埋葬することを断念し、代わりに廃墟に積み重なる遺体の数々を埋葬せぬまま花で覆うようになったことに言及する。ここに見られるのは、遺体となった人々の“life”の〈内容〉と〈形式〉がコールリッジのテーゼに反して乖離し、両者の間に裂け目が生じており、上から花で覆って裂け目を見えなくする現象である。戦争下では人々の“life”が不合理にも矛盾を孕むものになっており、それをかるうじて花で覆い隠しているのだ。〈バルカン三部作〉において戦争で行き場をなくした犠牲者の“life”は表象しえない否定性 (negativity) としてあらわれている。

Lyndsey Stonebridgeによれば、Hannah Arendtもまたヨーロッパのモダニズム文学においてはユダヤ系難民の生が否定性としてあらわされていると論じていると言う。Arendtの読みにしたがえば、カフカの『審判』(1914-1915年執筆)と『城』(1922年執筆)は、それぞれ不条理な理由で逮捕され裁判にかけられ処刑される人物K、自分が行くべき場所に不条理な理由で入ることを許されない人物Kを描くことで、ユダヤ系難民が不条理な理由で窮地に陥ったまま救われないさまを表象していることになる。これは、ヨーロッパのBildungsromanというヨーロッパの人権を有した人物に許される成長物語としての人生が、人権を剥奪され、国家による庇護権も奪われたユダヤ系難民には与えられないため、ユダヤ系難民を主人公とするBildungsromanは否定性としてあらわされると解釈できる。逆の観点から言えば、ヨーロッパのBildungsromanはユダヤ系難民に人権を付与していないのだ。

同様のことは〈バルカン三部作〉の数種類の難民の表象についても言える。この小説では、大きく分けて、(i)白系ロシア人、(ii)ルーマニアの銀行家家系のユダヤ系難民、(iii)主人公ハリエットを含む「避難者」としてのrefugees、といった数種類の難民に近い人物の人生がBildungsromanとして描かれると言える。ナチスが迫るアテネを船で脱出して地中海を渡ってエジプトへ向かうエンディングにおいて、船上のハリエットは自身と夫ガイを“exile”、“refugees”といった揺れを含む語で呼び(Manning 924)、周囲の“stateless”な人々と運命を共有するようでありながら実際にはイギリスのパスポートを有していてエジプトで保護されることが保証されている自身と周囲との距離を測りかねているようなアンビヴァレントな姿勢を示す。実際、(i)の白系ロシア人の人物は、アテネで警官の誤射した弾に当たって死去し、見知らぬ土地で身元確認が不十分な状態で埋葬場所から掘り起こされる運命にあり、(ii)の人物もまた、ハリエットの世界からは消えてユダヤ人ネットワークという〈ヨーロッパの内なる外部〉とも言える領域へと去ってしまう。

このように〈バルカン三部作〉において、難民はヨーロッパ文学の他者であるがゆえにそのBildungsromanは否定性としてあらわされる。主人公ハリエットは、難民間の差異にも意識的な人物としてそれぞれに異なるかたちで表象される“life”をみつめ、相対化しつつ生きる人物として表象されていると言えるだろう。

### Works Cited

- Connolly, Cyril. “Comment.” *Horizon*, vol. 1, no. 5, May 1940, pp. 309-14.
- Manning, Olivia. *Fortunes of War: The Balkan Trilogy*. New York Review of Books, 2010.
- . “Poets in Exile.” *Horizon: A Review of Literature and Art*, vol. X, no. 58, October 1944, pp. 270-79.
- Patten, Eve. *Imperial Refugee: Olivia Manning’s Fictions of War*. Cork UP, 2011.
- Rees, Goronwy. “Letter from a Soldier.” *Horizon*, vol. 1, no. 7, July 1940, pp. 467-71.
- Stonebridge, Lyndsey. *Placeless People: Writing, Rights, and Refugees*. Oxford UP, 2018.